

## 制度とコンヴェンション経済学 [下] \*

クリスチャン・ベッシー、オリヴィエ・ファヴロー [著]

須田文明、山本泰三 [訳]

### 3. 制度の分析装置としてのコンヴェンション経済学：見取り図

この第3節の目標は、第2節で検討した「基盤」としての制度から「派生した」制度の分析における、コンヴェンション経済学（以下 EC と略）の寄与を提示することにある。我々は、この第二の制度が副次的なものであると示唆するつもりはまったくくない。それどころか、それは、絶え間なく進化して人間の歴史の横糸を織りなし、質的に異なるが構造的に補完的な「創造的破壊」——シュンペーター以来、もっぱら経済学者が関心を払ってきた——の過程に従うものなのである。我々が集めてきた経験のすべてを通じて、この歴史はつねに同じやり方で（同じリズムではないとしても）、二重の運動に従って書かれる。すなわち「特殊への下降」（事前に存在する資源の環境としての諸制度）、および「一般性への上昇」（組織は価値を創造し、かつ破壊し、それが制度環境を変容させるだろう）である。こうした二重の運動は、それ自体によって、制度的な（脱）構築において「エージェント」を躍動させるのである。この意味で第3節では、ダイナミズムのみを問題としているとしても、それは二つの異なった様式（本稿の二つの段階をなす）に従っている。

最初の段階では、我々は特定の諸制度に向けられた経験的研究を提示するが、それは、二重の運動に制度を再び置き直すことによってのみ、制度の論理や性格をよりよく理解できる、という考え方によってである。ここでわれわれは以下の点において制度主義の多くの流れと再び合流する。ある状況づけられた歴史的動態における制度の位置づけを分析するという努力なしには、エージェントの個人的および集団的合理性をひどく過小評価するおそれがあるのである（抽象的な計算の論理によって戯画化されるか、あるいは膨大な記述に埋もれて窒息させられるおそれ）。EC のオリジナリティはおそらく、制度的装置の分析において、またその発生とエージェントのコーディネーションに対する制度の影響についての分析において、経験的データの記録に対して、多くの理論的（単に方法論的ではない）重要性を与えることにある。

第二段階においては、二重の運動——そのみが制度に対して、その完全な意味を与えることができる——において、個別の制度について検討した後に、我々は直接に二重の運動そのもの（広範な経済的ダイナミズムへと統合されるべき制度的変化モデルとしての）に集中する。ここではマイクロ・マクロの相互依存についてのコンヴェンション派の探究の概観が重要である。われわれはボルタンスキ・シアペロ(1999)に依拠することが可能であり、またマルクスの計画

---

\*本邦訳は、Bessy, C., Favereau, O. (2003) “Institutions et économie des conventions”, *Cahiers d'économie politique*, no.44, pp.119-164 の全訳である。なお紙幅の都合により、[上]・[下] 二部に分けて掲載される。上は『四天王寺大学紀要』第53号（2012年3月）に、下は同誌第54号に掲載予定である。

との思いがけないつながりを結び直すことができるだろう。

### 3. 1. 諸制度の経験的な分析にかんするコンヴェンション派の貢献

経験的内容に富んだ EC の研究のなかで、我々は、労働市場で作用している制度的装置を分析する研究、国家介入にかなり直接的に取り組んでいる研究を提示することにしよう。これらの研究がその豊穡さを示したのは、「社会政策」の執行様式という特別な問題に関してであるように思われる。さらにこの研究領域は、正義にかんする多元主義的アプローチに固有の研究のさまざまな姿勢を一望することを可能にする。

ここで注意のために言及しておく、EC の研究の総体は以下にかかわっている。すなわち生産物の品質の定義の過程 (Eymard-Duvernay 1989)、知的財産権の付与 (Bessy 1995)、規格化 (Thévenot 1997)、これらの過程の強調を伴う製品市場にかかわるのであり、企業間の競争と協力の政治という観点から争点を提起するのである。

EC の特徴の一つは、企業の機能様式とその活動の正当化の制約を理解するために、まさに「労働市場」と「生産物市場」を交差させることであった (注 35 を参照)。

企業間協力の政治はまた、公的介入に直接はつながらない制度への関心を、そしてそれゆえ、より「ローカル」な調整への関心を導く。それでも、こうした調整は「共通善」を構築する別様の方法、すなわち正義のさまざまな原理を関与させるのである。ここでは陸上輸送についてのビヤンクール (Biencourt 1996) の研究を引用することができよう。

#### 3. 1. 1. 研究の第一世代

我々は、EC の当初の研究に固有の経験的調査の二つの様式からはじめよう。

##### ①探究の最初の姿勢：正当化の試験から出発する

これは、法及び地位を付与する予め確立されたルールという意味での制度概念の外側で、正当化の秩序、すなわちルールの文法を経験的に登場させるために、人についての評価状況、すなわち (品) 質についての判断から出発する、という考え方である。それはシテのモデル (Boltanski et Thévenot 1989) の精緻化と並行して実現された経験的研究である。それでも判断の語用論 [pragmatique] の分析のこの社会的パースペクティブは、ひるがえって制度という概念<sup>66</sup>の基礎を再構築することに役立つのだが、また、「正義」を考察する別様の方法を対比させることもできる。裁判に訴えられた係争についての研究は、正義の多様なモデルの間のこのような対質の好例を提供している (「法律的な」分野についてのこうした多様な研究の要約については、Thévenot 1992 を参照)。

##### ②探究の第二の姿勢：制度的装置から出発する

とりわけ労働市場の規制に関して、法的ルールがいかんにして企業の装置と接合されているか

の分析にとっては、こうした方向性が、とくに実り多いことが明らかになった。サレら (1986) の「失業の発明」についての研究はその好例であり、30年代のフランスの地域間での失業率の相違が「賃労働関係」の多様性といかに関連しているかを示し、こうした生産性と失業のコンヴェンションの多元性を強調している。失業の測定のコングヴェンション的次元が強調されているのであって、統計的カテゴリ化の実施は、労働市場の作用についての表象から切り離しえないのである。同一のタイプの分析は、行政の認可を必要とした時期 (1975- 86) におけるフランスの解雇規則が、それほどには制約的でなかったこと示すために動員される。というのは、労働関係を改善し、企業内での地位を規定し、雇用者と被雇用者の義務を規定する特定の手法と、この規則とが整合的であったからである。要するこの規則は、市民社会的価値秩序と産業的=工業的価値秩序との間の妥協と関連していた特定の「賃労働コンヴェンション」と整合的であったのである (Bessy 1993)。

この二つの事例によって、労働関係を確立し、これを社会において正当化するさいの多元的方法を強調するように促され、また研究においてカテゴリ構築及び統計的データの生産についての社会的、歴史的条件を検討するように促されるのである。まさに統計的カテゴリの創出と、社会的、経済的世界のコーディングないしコード化の実施に関心を向けることで、デロジュールとテヴノ (Desrosières et Thévenot 1988) は、社会職業的カテゴリの、認知的であると同時に語用論的・政治的な側面を明らかにすることができた。なぜなら、行為のモデルと結合した共有表象はまた、徐々に認知的・実践的装置へと結晶するのであり、たんに政治的意志のみに由来するのではないがゆえに、われわれは制度の発生を明らかにし、またその安定化あるいは再検討の条件を描写することができるのである。

### 3. 1. 2. 研究の第二世代

上述の二つの研究の姿勢は、いわば収斂することを目的としていた。すなわち公的介入の装置は、その精緻化の起源にある正義原則をよりどころとするのだが、こうした正義原則は同時に実践のなかで動員されるのであり、そうした装置の構成という「マクロ水準」とそれらの現実化という「ミクロ水準」とを、一般と特殊とを結合させるのである。後から思うに、こうしたアプローチはきわめて野心的であることが明らかとなった。それは二つの限界に突き当たったのだが、ECのプログラムは次にこれを克服しようとしたのである。

「ミクローマクロ」の整合性は、以下のような仮説に立脚する。すなわち行動は、実際の現場での正当化（「偉大さ=大きさ」）と、各人に付与された権利との強い制約に服し、こうした制約により、各人は、社会的事実の制度化されたカテゴリに従って、自らの争いの動機を整理しなければならない。この仮説は、社会全体にとって妥当する制度的諸形態と、企業もしくは企業の集合に特殊な形態との間での一刀両断的すぎる区別を放棄する、という利点を持っている。しかしそれは、正当化されない行動の、よりローカルなコーディネーションの形態を説明しない。なぜなら、それは力関係に依拠しているから、あるいは他の正義感覚と関連しているからである。もう一つの限界は、正義原理の発生、「シテ」の創発、したがって「政治的なこ

と」の役割における、歴史的な分析の欠如である。こうした二つの限界を拒絶するという意欲によって、あらためて、以下のような二つの研究方法を伴う、研究の第二世代を取り出すことができる。

#### ①探究の第三の姿勢：「一般」と「ローカル」の間の媒介を発見する

前述の二つの観察の水準を保ちつつも、ECの経験的プログラムは実際に、90年代を通じてより「ローカルな」コーディネーションの形態へと方向転換した。この新しい方向性を証言する、やはり「社会政策」の領域での研究のなかでは、雇用の公共政策にかんするCEEの研究を引用することができる。それは伝統的な評価の様式を再検討することへと導くものである（Bessy et al 1995, Simonin et Gomel 1998）。それが強調するのは、行政の組織であり、公共政策のローカルな管理を担うエージェントに与えられた手段であり、彼らの活動と、以下のような媒介についての彼らの役割を導く原理の多元性である。これは、異なる正義諸原理の間での媒介であったり、あるいはそれらの諸原理とよりローカルな要請——企業アクター、もしくは雇用にかんする公共サービスのほかの利用者との持続的な協力関係を確立するという固有な要請——との間での媒介である。

排除の問題についての研究は、公共政策の実施が「制度的諸契機」と個人的コミットメント——厳格な正義の試験に背くこともありうる——を組み合わせることを示している。正義の厳格な試験の厳しすぎる効果を回避するために、公共サービスのエージェントは、諸装置の「慎重な」（正義とは対立した公平という意味において）修正をおこなうように促される（Thévenot 1995）。

同様の観点において、サレ（1998）は制度の「文脈主義的」理論および「状況づけられた国家」の像によって、公共的活動の問題を扱っている<sup>67</sup>。制度を生成の過程として考えることによって、彼はたんに共通善の多元性や考慮されるべき正義原則ないし正義感覚の多元性を強調するだけではなく、集合的行為を導き、個人的プロジェクトと共通善との両立可能性において行為するさいの、市民の学習能力も強調しているのである。

ここで、方法についての重要な点を明らかにすることができる。それは、統計的規則性と制度的ルールとの間にある直接的な因果的つながりを立証するという問題にかんして、おそらく「レギュレーション理論」とECとを対立させている。もし行為や係争のなかで法律的ルールやその他の制度的ルールを動員することが、諸状況すなわちよりローカルなコーディネーション形態における現実化や適合の調整を可能にするような資源・媒介者・媒介装置の総体に依拠しないのなら、こうしたルールは規範的力とはならないのである。経験的にそれは、「マクロ変数」間の関係をよく理解させるために、集合体を織り上げている「媒介的資源」の、体系的（統計的ではないとしても）な見取り図を導く（例えば、失業と雇用）。この方法論的な慎重さは、国際比較においても同じように有効である（Bessy et al 2001）。

#### ②研究の第四の姿勢：制度のダイナミズムの中に政治的なことを再統合する

プロセスとして制度を概念化することは、短期および長期における制度の動態という問題に帰着する。これは最近の時期に至るまで、EC によってはほとんど取り組まれてこなかった問題である（もし、それによって、制度進化の説明図式、あるいは少なくとも説明要因を与えることを目指しているとする）。その説明的目標は、歴史的手続きにいつそう高い価値をあたえることを前提とする。

この点については、B. Zimmermann(2002)によって提示されたドイツにおける失業の構築についての分析——それは「状況づけられた社会史」に位置づけられる——がとくに興味深い。なぜならそれは、長期の運動と短期の多様性を節合するに至っているからである。この分析は、長期については、失業補償制度の漸進的な出現とその安定化——新しい国家形態の創造、新しい市民的紐帯、すべての失業者に対する補償の権利の付与といった理由による——を描写する<sup>68</sup>。失業者および補償の定義基準の多様性は、この時期を通じて、またその後にも、拠って立つ「共通善」の性質に応じて異なったコンヴェンションに従っていた（扶助については市民的あるいは家内的な善、保険については商業的な善）。この視角にしたがえば、正義原則と関連したコンヴェンションの概念はよりローカルな特徴をもつのであろう。というのもこのコンヴェンションは、特殊な場所的・時間的広がりにおける失業者の（品）質の定義に基づいて合意を基礎付けているからであるが、非自発的失業の補償原理そのものについての合意は、別の性格のものであり、制度の根幹を形成しているのである。

このようにして、ボルタンスキ・シアペロ（1999）によって進められたマクロ的歴史分析は、新しいシテの実現と結びついた、正義の試験・「集合体」・認知的装置の制度化にアクセントをおくものと理解することができるのである。この運動は、前時代の資本主義で確立されたカテゴリ化の、現代における疑問視として描かれる。そのカテゴリ化とは、集中化された団体交渉にもとづき、国家に強く後押しされ、長期的なキャリアの組織化と所得分配のレギュレーションを可能にしたものであった。著者たちが「市民的・産業的」妥協として示したものが蒙ったこの再検討は、労働関係の個人化によって説明される。この個人化は、労働における自律と責任の名のもとでの、あるいは巨大組織および行政ルールの硬直性や官僚制的な首かせに対する、70年代の批判を起源としていたのである。このような批判は、一つの新しいシテの生成の諸前提となるものを打ち立てることになる。それが「プロジェクトのシテ」であり、そこでは正統な行為は、資源の永続的な再編と、能力の移動可能性に立脚しているのである。それでも彼らは、フレキシビリティの要求が真のシテの基礎を弱くすることを強調する。その理由は、確立された正当化の試験——それはカテゴリ化、すなわち社会的世界のあらかじめの定式化に依拠している——を配備することの困難さである。したがって彼らは、国家介入の後退に引き続く、ある制度的な欠陥——それは不平等の増大を促進する——の確認へと至ることになる。

### 3. 2. 制度的変化のコンヴェンション理論モデルの方へ<sup>69</sup>

EC は、その当初から行為の制度主義的理論を展開させると同時に、数年前から、経済アク

ターにとっての資源の「環境」としての、制度の理論を発展させている<sup>70</sup>。この最終節の目的は、制度についての準生態学的観点——インプット／アウトプットが、あるいは価値—貨幣で、あるいは価値—意味で示されることになるような生態系なのだが——から、新たな経済的ダイナミズムの輪郭を描き出すことである。研究を導くイメージもしくは寓話については、すでにこれまで何度も言及しておいた（とりわけ 2.1.1.）。すなわち組織は、価値—貨幣および価値—意味の結合的生産にかかる自らの活動のためのコーディネーション資源を、制度環境から汲み出すのである。したがってダイナミズムの大きな問題は、創出された、もしくは破壊された純 [net] 価値の効果（直接的な、もしくは政治の媒介による間接的な）による、こうした環境の再構成もしくは衰退、いずれにしてもその変容に関わっている。こうしたアプローチの新しさは二つの要素に由来し、これをまず分離しなければならない。一方では、価値の二重性がある——実証的考慮と規範的な考慮とは切り離し得ない。他方では、マイクロ・マクロ相互依存性がある——短期・中期での外生的変数は、長期には内生的変数となる。こうした二つの要素の結合こそが、第3節の冒頭で導入した「二重の運動」概念の背後に、再び見出されることになるだろう。すなわち「特殊性への下降」もしくはマクロからマイクロへの移行と、「一般性への上昇」もしくはマイクロからマクロへの移行である。

我々はまず最初に、この「二重の運動」を引き起こすことができる変化の作用素を提示することにしよう。このとき我々は、経済のダイナミズムにとって、この「二重の運動」が何を意味するかを明らかにすることができよう。このことは、まず一群の制度 [un ensemble d'institutions] のレベルで、次いで制度全体 [l'ensemble des institutions] のレベルに、分析を位置づけることと関連している。

### 3. 2. 1. 制度の変化についてのコンヴァンション理論モデル

EC の一般的モデルは三つの項、すなわち「制度」、「組織」、「コンヴァンション」を持っているので、これらの項のそれぞれについて変化の作用素は何であるのかを説明しなければならない。環境としての制度のコンヴァンション理論的展望は、三つの作用素の間での、特定形態の適合性を示しているのである。本質的な理論的貢献は、ボルタンスキとシアペロ(1999)の著作に由来し、我々はこれをいくつかの言及——コンヴァンション派ではない著作も大いに援用するが、EC はこれに新たな光をあてる——によって補完することになる。

①ボルタンスキ・シアペロにとって、制度<sup>71</sup> は二つの対立した論理に服している。「カテゴリー化」の論理は、(権利の評価及び配分の操作に特有な) 等価形態を、完全な一般性において、構築することである。他方で「移動」の論理は、(当該の論争にとって外在的な、ローカルで状況的な要素を動員することによって、) 完全な一般性において、正当化の制約を逃れようとするものである。こうしてボルタンスキとシアペロは、「力の試験」と「正義の試験」(もしくは偉大さ) との間の連続体という考え方に従って、「試験」という概念を再定式化ようになる。それは、正義の試験が、自らが設定されている秩序にとって外在的な力を隔離するため

に、コントロールの対象となっているのに対し、力の試験は、このコントロールをずらし、弱めるという意味においてである。正義の試験の構築は、「強者」の力の正統化もしくは制限を導く。というのも、この試験は、強者に対して、共通善への参画という制約の下でのみ、自らの力を示し、使用することを許容するからである。「強者／弱者」という非対称的力関係の対から、偉大さの観点からの「偉大なる者／小さき者」という正統なる対へと移行する——すなわち正当化の文法を見出すのである。しかしここで我々の関心を引くのは出発点ではなく到達点なのであって、これが EC の適用領域の主要な拡張を示している。ボルタンスキとシアペロを引用しよう。「力もしくは偉大さについて語ることで、我々は、実質的に異なった性格の実体ではなく、異なった試験レジームに言及しているのである。我々が偉大さと呼ぶのは、試験——その実施はカテゴリ化に基づいている——の中で明らかにされる実体の質である。我々が力と呼ぶのは、その登場が移動に基づくような試験の中で明らかにされる実体の質である。

(… ) 力とは、規範的、慣行＝合意的、法律的な秩序の制約なしに、つまりカテゴリ化を省略することで移動するものことなのである」(1999 p.411、なお pp.73-76 も参照)。

制度にかんするコンヴェンション理論の中に、力の概念を分析的に統合することは、制度進化のこうした説明要因を強調するためにきわめて重要な操作である。ここで制度化とは、迂回への、また不安定化への制度の傾向のことである。したがって、中心的な議論は、移動のレジーム<sup>72</sup>——アクターたちが、新しい利潤の源泉を求めて、力の試験を辿る——という考えに基づく。このように述べると、再生産の観点からの「マクロ」アプローチに見出される平凡な議論に似ているのではなからうか、と思われるかもしれない。ところが著者たちのオリジナリティは、一方では再生産と正当化を絶えず結合させるプランにもとづいて、我々が議論を進めることができることを証明することにあり、また他方では、アクターたちがルール、すなわち制定された試験をどのように迂回することができるかについての詳細な分析を提起することができることにある。正義の公共的試験の厳格化と結合した批判的能力に対応しているのが、その迂回に特有な、拡散的な移動能力なのであり、同一のアクターはしばしば、これらの二つのタイプの能力を交互に開拓することができるのである<sup>73</sup>。

我々はここでの議論を、ルールのコード化がもたらし得るすべての濫用について一般化することができよう。とりわけ、もともと考えられていた使用法からルールを逸脱させることで、このルールを戦略的に使用できるという可能性が、各人に開かれているのである。これこそ、我々がサール (Searle 1995) から援用する議論である。つまり彼は、コード化の対象となった制度の衰退を説明するのであるが、それは、「マクロ・レベル」(計画者や組織者)のアクターによると同時に、「ミクロ・レベル」のアクター(その活動は、上位レベルから発行されるルールによって枠組みづけられている)による戦略的裁量という観点から、これを説明するのである<sup>74</sup>。

他方 B.レイノー (Reynaud B. 2002) の研究が示すのは、コード化されたルールの実践への根付き、したがってインフォーマルなルールないしルーティンの支え——コード化されたルールの解釈及び適用のコンテクストを与える——が、どのように、その戦略的操作の可能性を制

限するか、である。その自動的な性格ゆえに、「ルーティン」は、集合的行為にコミットするアクターたちに対して、協力するという事について彼らが互いに意図を詮索することを回避させるのである。結局のところ、各人が協力し合い、できるだけ良好なコーディネーションに専心しようとするのは、各人が明示的なルールに従っているからなのではない。我々によれば、次のことが問題である。すなわちこうしたインフォーマルなルールないしルーティンは、正義の試験においてほとんど明示化可能でなく、動員できないことなのである。

したがって、一方では、コード化されたルールの戦略的操作（ルールの衰退をもたらすおそれがある）を回避するために、他方で、あらゆる正当化の不可能性を回避するために（通常の経験に由来する規範が、正義の試験にいかなる手がかりも与えないならば、不平等を永続化させるリスクを伴うのだから）、アクターにより共有されている経験へのルールの根付きという問題が提起されることになる。

②「制度」という項に関して、我々は、変化の作用素について長々と論じてきたところである。我々は、他の二つの項についてはより簡潔に述べておこう。「組織」<sup>75</sup>に関しては、H.ホワイト（White 1992）により精緻化された「社会的行為の構造主義理論」——そこで、彼は埋め込み *embedding* と切断 *decoupling* という二つの過程の間での根本的二重性を定式化している——を援用しなければならない。我々の仮説は以下のようであろう。すなわち埋め込みとは、組織について、カテゴリ化に求められている効果であり、切断とは、組織について、移動に求められている効果である。つまりこれらの二つの過程が、組織にとっての変化の作用素であろう。

③「コンヴェンション」については未解決なままである。以下のことを指摘しておくことができるかもしれない。「コーディネーションの失敗」にとっての最大限の許容水準と、「再生産の失敗」のための最小限の許容水準とが、「正当化された共通世界」の表象としてのコンヴェンションを作用させる。これらの水準は機能的関係により結合されている<sup>76</sup>。すなわち贈与・反対贈与という交換（Caille 2000）、もしくは社会的交換（Reynaoud J.D. 1997）が行われる象徴的な「高さ」を、この機能的関係は示しているのであろう。この場合、カテゴリ化（ないし組織であれば、埋め込み）は、第二の議論（非再生産の最小限度の許容水準）の上昇に対応するであろうし——しかも最初の議論（非コーディネーションの最大限度の許容水準）の低下が起こることなしに——、もしくは、正当化の論理においては、その上昇を伴うのである。このことは、効率性と公平性の同時的増加を意味しているだろう。同様に移動（もしくは、組織であれば切断）は、第二の議論の低下に対応するが、それはあるいは、第一の議論の上昇（効率性と公平性の考慮の再均衡）によってか、もしくは低下（好都合な力関係を課すという意味）によってである。もちろん、推論は、この段落ではマイクロもしくはメゾ、次の段落ではマクロといった同一のプランに基づいて、こうした変数をフォローするようにしなければならない。

要するに、EC の一般モデルにおいて我々は、ダイナミズムの分析手法を保有しているので



あり、そこでは、「制度」環境に関わる作用素の根本的な対（カテゴリ化／移動）が、この環境のエージェントを対象とする作用素のレベルで、彼らの行為（「組織」）の中に、もしくは彼らの表象（「コンヴェンション」）の中に、必要な変更を施して、見出されるのである。三つの変数をもったモデルを作動させることで、また単純化のリスクを受け容れることで、我々は、上述のことを要約することができる。すなわち「制度」は、カテゴリ化によって、「組織」の埋め込みを目標としているのに対し（また「コンヴェンション」の改善を目標としているのに対し）、「組織」は、「制度」の移動によって、切断を目標としている（「コンヴェンション」の軽減を目標としている）、と述べることができるのである。

我々は、制度的変化の作用素を特定した。逆に、我々は、こうした作用素の背後にあるアクターたちについて何も語ってこなかった。彼らは何であるのか。彼らの目標は何か。彼らの行為の総合的帰結は何であるのか。今や我々は、制度全体のレベルに自らを位置づける契機を逸すべきではないであろう。

### 3. 2. 2. 制度をともなう変化のコンヴェンション理論モデル

①まず最初に、制度的変化の作用素をなす基本的対概念、すなわちカテゴリ化／移動について検討しよう。ボルタンスキとシアペロにとって、カテゴリ化の要因を促進する主たる刺激は批判である。それは本質的に「小さき者」によって行われるのであるが、「偉大なる者」による批判を除外することはできない。というのも、あらゆる経済的エージェントが倫理的判断能力を有しているからである。すなわち、資本主義のあらゆるダイナミズム——あるいはその主要な部分に限っても——が批判から発生している、などという愚かなテーゼを支持するべきではないが、とはいえ、批判の役割は歴史的に過小評価されてきた、と我々は考えているのである。「資本主義のダイナミズムそのものは部分的にしか批判と関連していない（少なくとも、我々がこれまで理解してきた、声をあげること——A.ハーシュマン（Hirschmann 1970）の概念化における「発言 voice」——を想定しているという意味での批判とは部分的にしか関連していない）。資本主義のダイナミズムを説明するためには、ハーシュマンにおける「退出 exit」タイプの批判の効果、すなわち競争タイプの批判の効果を追加しなければならないであろう」（1999 p.89）。発言による批判に、退出による批判を追加することで、われわれは、当初排除しておいたテーゼを再び見出すことになるだろう。すなわち資本主義のあらゆるダイナミズムは、このように一般化した批判から生じるというものである。

この純粋に意味論的な一般化とは逆に、我々の注意を引くに違いないのは、発言／退出、批判／競争の間に描かれる多様な接近であり、そこから我々は、示唆に富んだ教訓の材料を引き出すことができるのである。批判が、価値—意味の空間に属するように、競争は価値—貨幣の空間に属する。つまり現状を受け容れることの拒絶は、カテゴリ化と移動という二つの異なった様式に従っているのである。カテゴリ化は競争を平定し、整序するが、競争は、移動を通じて解き放たれ、激化するのである<sup>7)</sup>。逆に批判は「きわめてしばしば移動の領域に属する修正のカテゴリ化の様式に則して挑まなければならない」（1999 p.413）。要するに、ハーシュマン

のおかげで、我々はこうした接近、すなわち制度変化のこうした二つの要因の間での構造的補完性を見出すのである<sup>78</sup>。もちろん、こうした補完性は、以下のような機械的受容において理解されてはならない。すなわち一方の活発さが常に、他方の活発さと反比例している、かのようには理解されるべきではない<sup>79</sup>。ある特定の形態の比例関係は排除されるべきではないのである。いずれにしても、こうした補完性が意味しているのは、資本主義的ダイナミズムの分析は、価値—貨幣の空間と、価値—意味の空間との間の複雑な相互関係を考慮しなければならない、ということである。ここでこそ、価格空間と価値空間（そこで問題となっているのは明らかに価値—労働であったとしても）との関係についてのマルクスの図式を想起せずにはすまずことはできないのである。こうした想起は唐突ではあっても、全くの的外れではない。つまりその著書の第三部でボルタンスキとシアペロは、搾取の理論を精緻化させているのであるが（1999 pp.461-5）、それはマルクスがそうしようとしたように客観的な基礎に基づいてではなく、道徳的基礎に基づいてなのである。というのも搾取は正当化の逆方向で定義されることになるからである<sup>80</sup>。EC は別の手段によってマルクスのプロジェクトを追求する。つまり価格の空間は別の価値空間と関連づけられるが、資本主義の理論的説明は、その批判的告発と不可分なのである。EC のプロジェクトがコーディネーションと再生産との分離された論理を再綜合することにある以上、これは当然のことではないだろうか。

今や我々は新しい観点から、批判と競争の背後にどのようなアクターが控えているかという疑問に答えることができる。EC における法律の存在について、上で我々が語ってきたことによって、我々は、自然人と法人とを（後者における私的法人と公的法人とを）注意深く区別するように促される。批判とは、まずもって自然人の行うことである。というのも道徳的判断の特徴は、生身の人々によってしかなされ得ないことにあるからである<sup>81</sup>。他方、資本主義における競争は、本質的には企業、つまり私的法人の行うことであり、その内在的特徴は、非道徳性 *a-moralité*（不道徳 *immoralité* というよりも）であるが、それはまた資本主義の内在的特徴の一つでもある<sup>82</sup>。EC が提起しなければならないであろう興味深い問題は、法人の中における自然人の責任の問題である。ところが我々はここではこの探求を続けるわけにはいかないであろう<sup>83</sup>。こうした探求は、集団ないし組織の成員としての経済人についての理論——オーソドクス派には根本的に欠如している——を提示することを必要とするであろうから。それは現在、社会心理学の観点から開発されつつある（いわゆる「社会的アイデンティティ」研究の潮流については Th evenon[2003]を参照）。

移動が私的な法人、もしくは自然人の行うことであるとすれば、カテゴリ化は、公的法人を離れては（そして、こうした法人の中で、もしくはそれを離れて規定された自然人の行動を離れては）考えにくい。

②いまや、制度的変化の要因の下流に身を置き、これらの要因の結合作用がいかに「二重の運動」——これによって、その時々、マイクロ・マクロの相互依存性が紡ぎ出される——に影響を与えるかを検討するときである。

まず、「環境」としての制度というメタファーの「凝固した」形態がある。制度は、上から下への（トップダウンの）集計の要因である。つまり制度は、正当化されたゲームの規則を提示することで、マクロ経済レベルから出発して、ミクロ経済を製造する。すなわちこうした枠組みに依拠した意思決定を行うことで、正当化において抵抗がある場合に、成功裏に脱却することができるのである。別の方向では、組織が、（ボトムアップの）直接的集計の要因である。すなわち組織はミクロ経済レベルから出発してマクロ経済を製造するのである。つまり組織は、その制度的環境の中でコーディネーションの資源を採取することで、その物質的環境の中から、多様でヘテロなインプットを採取して、これらを結合する。さらに組織は、集計されるのに十分に均一で均質な財とサービスをここから引き出すのである。こうして出発点としてのシナリオを思い描くことができる。そこにおいては組織は、自らの持続性を確保するために多くの価値—貨幣を創出してきたのであって、しかも組織は、制度が客観化された形態の下でその蓄積を確保しているような価値—意味を破壊することもなかった。もしそうであれば、価格の空間と価値の空間とにおいて同時的均衡があることになるだろう。

こうしたシナリオは、背景としては有効ではあるが、逆に、資本主義経済では一度として実現する機会がなかった。その理由は、組織は、競争に参加するためには、移動の要因を作動させることに利益を持つからである。すなわち制度的環境が再構築され得るのは、自ら変容し、カテゴリ化の要因を作動させることによってでしかなく、このことは新たに、移動の要因を再稼働させるであろう。換言すれば、価値—貨幣の創出過程は、価値—意味の創出過程に対して、中期的には、むしろ破壊的影響を有する。長期的には、批判を考慮することで、二つの過程が並行して作用するような資本主義の歴史の過程を記録することができる。マクローミクロ、ミクローマクロという二重の運動の結果をさらに研究するために、我々が採用しなければならぬのは、環境としての制度というメタファーの、こうした「流動的」形態なのである。

最初になすべきコメントは、こうした（カテゴリ化と移動という）対概念の対立的諸力の結果は、システムをなすような社会的なこと（ないし経済的なこと）ではあり得ないであろう、ということである。社会的なことがシステムを作らないということは、ひるがえって、コーディネーションの失敗と再生産のコンフリクトにより特徴づけられる世界において、逆説的にも、制度のための強力な正当化を供給してくれることであろう。制度は秩序、つまりコーディネーションないし再生産の純粹言語によって夢見られていたような、この絶対的秩序を制定するのではなくても、少なくとも意味を与え、もしくはより正確に言えば、「共通世界」の足場を組むための目印もしくはカギを提供してくれるのである。かくして、社会が自らについて与える判断を基礎付けるために、したがって、政治的な結合を維持するために<sup>84</sup>、とりわけて貴重なものとして、特定の統計的大きさ〔価値〕 *grandeurs* が区別されることになるだろう。つまり我々が別のところで論じたように、失業率並びに成長率はこの種の変数なのであり、またもしマクロ経済的均衡という概念が実践的な（純粹に観念的な、ではなく）妥当性を持ち得るとすれば、この概念は、コンヴァンションの観点からこれらの変数の恒常性の解釈に基づいていなければならない。というのもこの恒常性は共通の将来についての集会的表象の軸となるであろう

うからである<sup>85</sup>。

いま述べたのは、大きさ—貨幣の空間についてである。大きさ—意味の空間とは何であろうか。これが我々の第二のコメントの対象である。

二つの空間の間の関係の性格についていくつか語ることから始めなければならない。経済学者は二つの基準を有している。すなわち一方で、コーディネーションの言語において、パレート最適は価格空間のマクロ均衡を分類することができるだけであり、同一の変数を正確に動員する。その存在論的装置は、いかなる種別性も持たない。他方で、再生産の言語において、マルクスは価値空間（労働）に、単に自律的なだけでなく、いわば上級の存在論的装置を付与する。というのも、この装置はこの空間を、価格空間の長期的ダイナミズムが説明される場所とするからである。コーディネーションと再生産とを再び総合することで、ECのアプローチは第三の道を開く。パレートとの対比で言えば、価値空間は、価格空間を「判断する」だけに留まらず、この空間はそこで起こっていることを「説明する」ことに貢献する。というのも、経済的エージェントは、お互いにコーディネートするためには、単に価値—貨幣だけではなく、価値—意味も使用しているからである。つまり規範的なことが記述的なことに属するのである。マルクスとの対比で言えば、価値空間は価格空間に対して突出した地位にあるわけではない。つまり一方では規範的对象と経済的对象との客観化様式の違いにもかかわらず、通常の諸個人は、価値空間へのアクセスを有しているのである。こうした空間は、マルクスにおけるように目覚めた活動家や批判的経済学者だけに開かれているのではない。他方で、経済関係の現実世界は、我々が批判の顕著な役割を通じてみてきたように、規範的判断の本質的な素材を供給してくれる。今や、記述的なことが規範的なことに属するのである。

具体的にはこのことは、二つの空間の特定の自律性を意味することになる。価値—意味は価値—貨幣に作用するが（逆もある）、いわば定義からして、価値—貨幣の領域では登場しない。たとえ行為が解釈的合理性によって促されているとしても、行為の集計に由来するマクロ均衡は、価格空間の日常的な量的変数によって表明され続けることになるだろう。つまりこの均衡は、正義と不公正という規範的な配慮（規範的価値空間から借用された）を考慮することなしには、完全には理解できないのである<sup>86</sup>。重要な経済的効果を有する批判が、ひとりでの中断してしまう場合には、規範的領域の相対的自律性に関する考察は、規範的価値空間にいつその重要性を与えるだけである。正当化の文法と結びついた「規範的マクロ均衡」（敢えてこの言葉を使わせてもらえば）といったタイプについて考察することが、不適切でないばかりでなく、緊要なのである。ところで二つの概念が提示されてきた。ECのプログラムが開始される以前に、ロールズの反省的均衡という概念が存在する（『正義論』の第1章から導入されている）。これは、個人的な道徳的信念と倫理原則、規範的理論との間での継起的な調節により獲得される整合性を特徴づけている。残念ながら、この概念はおそらく、制度全体というよりもむしろ、一群の制度にいつそう適している。その正反対といえるのが、マックス・ウェーバーから借用され、ボルタンスキとシアペロにより採用された資本主義の精神という概念によって「資本主義へのコミットメントを正当化するイデオロギー」（1999 p.42）を示したことである。

この概念は、反省的均衡の概念を、「資本主義の制度」と呼ぶことができるようなものへと一般化するように思われる。もちろんこの「資本主義の制度」はウィリアムソンに倣っているのだが、それは制度環境の取引費用論的観点の内部に留まらない、という条件の下である。国内的でもなく、超国民的でもないような中間的な概念を持ち得ることが望ましいであろう。こうして我々は、その途上で、国民的文化の多様性という大きな障害物に突き当たるかもしれない。EC に属する二つの最初の探求では、フランスと米国を比較した Lamont et Thévenot(2000)と、フランスと英国を比較した Bessy, Eymard-Duvernay, de Larquier, Marchal(2001)がある。

\* \* \*

我々は、少なくとも経済学によってはあまり開拓されていない大陸の、探求の緒に就いたばかりでしかない。コーディネーションと再生産との再総合、価格空間と価値空間との相互作用だけを指し示す羅針盤によって、我々が正しい方向に進んでいることを、不安感を持つ経済学者に対して保証するにはどうすればいいのだろうか。我々によれば、このような方向性こそが、経済研究の数世紀来の伝統における現在の膠着状態によって要請されているすべてなのである（しかしそれは、こうした伝統との根本的断絶をもたらすだろう）。以下のような極端な比喻が可能かもしれない。すなわち社会的劇場においては、「制度」が俳優を求める役であり、「組織」は役を求める俳優であり、「コンヴェンション」は劇作品の主題であるとすれば、制度派経済学者は、その劇場の将来について検討している劇場支配人（もしくは代々の劇場支配人の系譜）に違いない。後世の審判（価値空間）には無関心と思われる即座の経済的成功（価格空間）が存在する。しかしながら過去の支配人たちは、世代から世代へと金になりそうな配役を提供し続けてきた。（経済人の規範的判断能力に対する、経済学者のあからさまな無視を正当化する）二つの空間の間での独立性についての確固たる感情は、どこから生じるのであろうか。劇場支配人はその答えを持ち合わせている。その経済人を構築するために、オーソドクスな経済学者は、一般化の唯一の軸しか見ていなかった。二つあるのに、観客の構築におけるたった一つの次元だけしか見なかったのである。すなわち即座の成功は空間における一般化であり、後世への配慮は時間における一般化である。真に一般的な経済理論は、二つの軸において妥当でなければならないであろう。真に近代的な経済理論は、自らが、今まで、一つの軸でしか妥当ではなかったことを認めなければならないであろう。

---

<sup>66</sup> リクルールによる、正義の原理と法の判断との間の媒介についての言及を参照。

<sup>67</sup> 経験的側面について、サレは失業者による起業の公的支援についての A. -L. Aucouturier(1998)の圧倒的な仕事に依拠している。

<sup>68</sup> この仕事のなかで著者は以下の謎に答えようとしている。世紀転換期にドイツは失業保険の国民的システムを（ビスマルク的保険の配置とともに）備えるように思われたものの、こう

---

したシステムがコード化されるには、1927年の法律まで待たなければならなかった。ドイツの大経営者の経済的利害に政府が忠実だったという仮説に対して、著者が、失業に対する闘争という国民的政策の実施における妨げを理解するための鍵として提示したのが、国家形態と国民的集団において労働者をつなぎとめる紐帯なのであった。この視角によれば、労働者が「二級の」市民というポジションから脱し、政治的共通善が失業者を市民として国民集団に統合することを許すためには、第一次世界大戦を待たねばならなかった。著者の議論は、新しい制度の基礎において市民的紐帯を確立するという問題をうまく提示することを可能にしている。シテのモデルによるならば、国民的集合体への労働者の帰属に引き続く、失業補償装置の一般性への上昇は、「市民的」正統性の原理への準拠として解釈することができる。

<sup>69</sup> 「組織的」変化のコンヴェンション理論的モデルと混同すべきではない。Favereau, Le Galle(2003)を参照せよ。

<sup>70</sup> 人間空間の「環境」としての制度という考えの由来は、ECにではなく、我々によれば、Ricoeur(1990) p.296, (1995a) p.37, (1995b) p.76に帰すべきであろう。補足的な定式化は以下にも見られる。White(1992)、とりわけ p.228、Descombes(1996) p.15、De Munck, (1999) p.137。

<sup>71</sup> より正確には「制定された試験」であるが、一般化が自然である。言葉遊びのリスクを冒すことになるかもしれないが、つまり試験が制度化された後で、我々は試験された制度と関係を持つのである。

<sup>72</sup> Aglietta, Orlean(2002 第5章)は、同様にして、制度・貨幣のレギュレーションにおける「集権化」と「分裂化」を対比させている。

<sup>73</sup> ボルトンスキとシアペロは以下のような仮説を述べる。すなわちこうした迂回の運動はしばしば最も「偉大なる者」のイニシアチブになる。こうした人々は、その暗黙的理解——利潤の追求は、確立されたルールのある種の枠組みを犠牲にしてしかなされ得ないことへの理解——のために、特定の秩序において成功を収めたのである。それほど物質的ではない見方によって彼らは次のような考え方も指摘している。「偉大なる者」はルールを、より詳細にはルールの遵守、道徳を批判する。というのもこうした人々は、自らが召喚されたスケールの大きなプロジェクトの実施が、旧来のやり方を破壊することなくしては成就し得ないことに得心しているからである。

<sup>74</sup> 貨幣の例があろう。中央銀行は貨幣の発行の中に、経済コントロールの手段を見る。さらに経済エージェントが、制度的事実の構造に見合った意図の形態を持っていなければならない。すなわちこの場合、貨幣の交換機能である。彼らは、権力及び威信のために貨幣を欲することもできる。ケインジアンであれば、将来の不安を軽減するために蓄財を強調するかもしれない。彼らはまた偽金を発行することもできる。こうした区別を組織分析に適用させることもできる。そこでは、ルールの戦略的操作が反生産的な結果を持ちうるということがよくわかるのである。

<sup>75</sup> ここでの力関係もしくは権力関係の研究手法は、組織理論の内部では、二つのレギュレーション・モデル(Reynaud J.D. 1995により精緻化された)ないしダブルループ組織学習への障害(Argyris 1988により研究された)との親和性を示している。

<sup>76</sup> J.D. Reynaudの「社会的レギュレーションの理論」による、この議論の説明については、Favereau(2003b)を参照。

<sup>77</sup> 企業間での競争のデータ(費用、技術、製品特性など)に「移動」というタームを適用することで、我々は、この言葉の意味を濫用して理解してはいないだろうか。これらのデータが、企業の間での競争的ゲームの規則として、(高度の抽象レベルで)理解することができる以上、それが濫用であるかどうかはわからない。ところがゲームの規則という概念は、本稿全体を通じて、制度の最小限の読解の我々のカギなのであった。

<sup>78</sup> ECはこうした形態の補完性を強調する。他方でレギュレーション理論は、青木昌彦にならって「制度的補完性」を強調するのである。

<sup>79</sup> 歴史的には、資本主義が、自らが継続的に引き起こす不平等に対する社会的・政治的反応に由来する制約から絶えず移動することで、そのダイナミズムを引き出してきたことは、否定し

---

がたい（その根底的な非道徳性については、Boltanski, Chiapello 1999 pp.58,80 を参照せよ）。

<sup>80</sup> 「結局、搾取の告発は、「偉大なる者の恩恵が小さき者の恩恵を作り出す」という格言——シテの公理の支柱をなしている——を逆向きにさせ、むしろ小さき者の不幸が偉大なる者の幸福を作り出すことを確認させるのである」（1999 p.464、傍点本文）。

<sup>81</sup> 自然人のみが顔 *visage* を持っているのであり、レヴィナスの全作品が示しているように、「顔への関係は、はじめからして倫理的である。顔とは、殺すことができないものであり、あるいは少なくとも、それについて語ることに意味があるようなものである。すなわち「おまえが決して殺せないようなもの」なのである。（中略）顔の登場の中に、あたかも主人が私に語りかけているかのように、掟＝命令 *commandement* が存在する。しかしながら同時に、他者の顔が欠如している。私は貧しき者のためにはすべてができるのであり、貧しき者に私はすべてを負っているのである」（Lévinas 1982 pp.91,93、また Rey 1997 第一章を参照）。

<sup>82</sup> 注 79 を参照。

<sup>83</sup> 二つを参照するにとどめよう。Genard(1999)、Bovens(1998)。

<sup>84</sup> ここでは再び Desrosieres(1993)を参照することができるし、Gadrey(2003)により補足することもできる。

<sup>85</sup> こうした方向での試みについては Favereau(1999)を参照のこと。

<sup>86</sup> こうして、ホワイトの競争市場モデルは、その解釈が、品質のコンヴェンションへの依拠により補足されるのを見ることになる。Favereau, Biencourt, Eyamrd-Duvernay(2002)を参照。

## 文献

Abensour C. (1996) *Le Droit*, collection “Philosoper”, Paris, Éditions Quintette.

Abensour M. (2003) L’État de la justice, *Magazine littéraire* : Emmanuel Lévinas, avril, pp.54-7.

Aglietta M. et Orléan A. (2002) *La Monnaie entre violence et confiance*, Paris, Editions Odile Jacob.

Aoki M. (2000) *Information, Corporate Governance and Institutional Diversity*, Oxford, Oxford University Press. (『経済システムの進化と多元性：比較制度分析序説』東洋経済新報社、1995)

Arendt H. (1983) *Condition de l’homme modern*, Traduction Française de: *The Human Condition* (1961), préface de Paul Ricoeur, Paris, Calmann-Levy. (志水速雄訳『人間の条件』筑摩書房、1994)

Arendt H. (2002) *Les origines du totalitarisme*, nouvelle traduction, Paris, Gallimard, collection Quarto. (大久保和郎ほか訳『全体主義の起源』みすず書房、1972-1974)

Argyris C. (1988) Problems in producing usable knowledge for implementing liberating alternatives, in Bell D.E., Raiffa H., Tversky A. (eds), *Decision Making*, Cambridge, Cambridge University Press, pp.540-61.

Aucouturier A.-L. (1998) *Évaluation des politiques d’emploi et action publique. L’exemple de l’aide aux chômeurs repreneurs et créateurs d’entreprises*, Thèse de doctorat de sciences économique, Université Paris X.

Batifoulier P. ed. (2001) *Theorie des conventions*, Paris, Economica. (海老塚明・須田文明監訳『コンヴェンション理論の射程』昭和堂、2006)

Bessy C. (1993) *Les licenciements économiques : entre la loi et le marché*, Paris, CNRS Éditions.

- Bessy C. (2002) *Représentation, convention et institution : des repères pour l'économie des conventions*, Document de travail du Centre d'Étude de l'Emploi, no.20, décembre.
- Bessy C., Chateauraynaud F. (1995) *Experts et faussaires : Pour une sociologie de la perception*, Paris, Métailié.
- Bessy C., Eymard-Duvernay F., de Larquier G., Marchal E. (éds) (2001) *Des Marchés du travail équitables? Approche comparative France/Royaume-Uni*, Bruxelles, PIE-Peter Lang.
- Bessy C, Eymard-Duvernay F., Gomel B., Simonin B. (1995) Les politiques publiques d'emploi : les agents publics locaux, *Cahiers du centre d'Étude de l'Emploi*, no.34, pp.3-34.
- Biencourt O. (1996) Concurrence par la qualité dans le transport routier de marchandises : normes ou réseaux?, *Revue d'Économie Industrielle*, 75, 1er trim, pp.211-22.
- Bloor D. (1997) *Wittgenstein, Rules and Institutions*, London, Routledge.
- Boltanski L. (2002) Necessite et justification, *Revue économique*, vol.53 no.2, mars, pp.275-289.
- Boltanski L. et Chiapello E. (1999) *Le nouvel esprit du capitalisme*, Paris, Gallimard, collection nrf Essais.
- Boltanski L. et Thevenot L. (1991) *De la justification. Les économies de la grandeur*, Gallimard, Paris.  
(三浦直希訳『正当化の理論：偉大さのエコノミー』新曜社、2007)
- Boltanski L. et Thevenot L. (eds) (1989) *Justesse et justice dans le travail*, Cahiers du CEE, no.33, Paris, PUF.
- Bourdieu P. (1980) *Le sens pratique*, Paris, Éditions de Minuit. (今村仁司・港道隆訳『実践感覚』みすず書房、1988-1990)
- Bovens M. (1998) *The Quest for Responsibility: Accountability and Citizenship in Complex Organisations*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Boyer R. et Sallard Y. (eds) (2002) *Théorie de la régulation : l'état des savoirs*, nouvelle édition complétée, Paris, La Découverte.
- Boyer R. et Orléan A. (1994) Persistance et changement des conventions, in Orléan A. (ed), *Analyse économique des conventions*, Paris, PUF, pp.219-48.
- Caillé A. (2000) *Anthropologie du don : le tiers paradigme*, Collection Sociologie économique, Paris, Desclée de Brouwer.
- Castoriadis C. (1975) *L'institution imaginaire de la société*, Paris, Éditions du Seuil. (江口幹訳『想念が社会を創る：社会的想念と制度』法政大学出版局、1994)
- Chateauraynaud F. (1991) *La faute professionnelle - une sociologie des conflits de responsabilité*, Paris, Métailié.
- Commons J.R. (1990) *Institutional Economics. Its Place in Political Economy*, Transactions Publishers, New Brunswick.
- Corei T. (1995) *L'économie institutionnaliste : les fondateurs*, Paris, Economica.
- Danblon E. (2002) *Rhétorique et rationalité : essai sur l'émergence de la critique et de la persuasion*,



- Bruxelles, Éditions de l'Université de Bruxelles.
- Daniels N. (1996) *Justice and Justification: Reflective Equilibrium in Theory and Practice*, Cambridge, Cambridge University Press.
- De Munck J. (1999) *L'institution sociale de l'esprit*, Paris, PUF, Collection L'interrogation Philosophique.
- Defalvard H. (1992) Critique de l'individualisme méthodologique revu par l'économie des conventions, *Revue Économique*, no.1, pp.127-43.
- Defalvard H. (2002) L'économie des conventions à l'école des institutions, *Économie Appliquée*, Tome LV, no.4, pp.7-33.
- Descombes V. (1996) *Les institutions du sens*, Collection critique, Paris, Les éditions de Minuit.
- Desrosières A. (1993) *La politique des grands nombres : histoire de la raison statistique*, Paris, La Découverte.
- Desrosières A. et Thévenot (1988) *Les catégories socio-professionnelles*, Collection Repères, Paris, La Découverte.
- Dodier N. (1995) *Des hommes et des machines*, Paris, Métailié.
- Douglas M. (1999) *Comment pensent les institutions?*, Paris, La Découverte/M.A.U.S.S.
- Dupuy et al (1989) Introduction au numéro spécial sur l'économie des conventions, *Revue Économique*, vol.40, no.2, mars, pp.141-5.
- Dupuy J.P. (1992) *Introduction aux sciences sociales : logique des phénomènes collectifs*, Paris, La Découverte.
- Dupuy J.P. (1992) *Le sacrifice et l'envie : le libéralisme aux prises avec la justice sociale*, Paris, Calmann-Lévy.
- Dworkin R. (1985) *A Matter of Principle*, Cambridge, Harvard University Press.
- Dworkin R. (1986) *Law's Empire*, London, Fontana Press. (小林公訳『法の帝国』未来社、1995)
- Esposito R. (2000) *Communitas : origine et destin de la communauté*, Les essais du Collège International de Philosophie, Paris, PUF.
- Eymard-Duvernay F. (1989) Conventions de qualité et formes de coordination, *Revue Économique*, vol.40, no.2, mars, pp.329-359.
- Eymard-Duvernay F. (2001a) Principes de justice, chômage et exclusion, in Bessy et al (eds), *Des Marchés du travail équitables? Approche comparative France/Royaume-Uni*, Bruxelles, PIE-Peter Lang, pp.271-297.
- Eymard-Duvernay F. (2001b) L'économie des conventions a-t-elle une théorie politique?, Postface in Batifoulier (ed), *Theorie des conventions*, Paris, Economica, pp.279-97. (須田文明訳「コンヴェンション経済学に政治理論はあるか」海老塚明・須田文明監訳『コンヴェンション理論の射程』昭和堂、2006、pp.358-382)
- Eymard-Duvernay F. (2002) Pour un programme d'économie institutionaliste, *Revue Économique*, vol.53, no.2.mars, pp.325-36.

- Favereau O. (1989) Marchés internes, marchés externes, *Revue Économique*, vol.40, no.2, mars, pp.273-328.
- Favereau O. (1994) Règles, organisation et apprentissage collectif : un paradigme non standard pour trois théories hétérodoxes, in Orléan A. (ed), *Analyse économique des conventions*, Paris, PUF, pp.113-37.
- Favereau O. (1995a) Apprentissage collectif et coordination par les règles : application à la théorie de salaires, in Lazaric N. et Monnier J.-M. (eds), *Coordination économique et apprentissage des firmes*, Paris, Economica, p.23-38.
- Favereau O. (1995b) Convention et régulation, in Boyer R. et Sallard Y. (eds), *Théorie de la régulation : l'état des savoir*, Paris, La Découverte, pp.511-20.
- Favereau O. (1998a) Décisions, situations, institutions, in Vinokur A. (ed), *Décisions économique*, Paris, Economica, pp.153-68.
- Favereau O. (1998b) Notes sur la théorie de l'information à laquelle pourrait conduire l'économie des conventions, in Petit P. (ed), *L'économie de l'information : les enseignements des théories économique*, Paris, La Découverte, pp.195-238. (中原隆幸・須田文明訳「コンヴェンション理論が寄与する情報理論についての覚え書き」四天王寺大学紀要、第53号、2012、近刊)
- Favereau O. (1999) Salaire, emploi et économie des conventions, *Cahiers d'économie politique*, no.34, Printemps, pp.163-94.
- Favereau O. (2001) L'économie du sociologue ou : penser (l'orthodoxie) à partir de Pierre Bourdieu, in Lahire B. (ed), *Le travail sociologique de Pierre Bourdieu : dettes et critiques*, Paris, La Découverte/poche, pp.255-314.
- Favereau O. (2003a) La pièce manquante de la sociologie du choix rationnel, *Revue Française de Sociologie*, à paraître.
- Favereau O. (2003b) La Théorie de la Régulation Social est-elle au centre de l'Économie des Conventions?, in de Terssac G. (ed), *La Théorie de la Régulation Social de Jean-Daniel Reynaud : débats et prolongements*, Paris, La Découverte.
- Favereau O., Biencourt O. et Eymard-Duvernay F. (2002) Where do markets come from? From (quality) conventions!, in Favereau O., Lazega E. (ed), *Conventions and Structures in Economic Organization*, Cheltenham, Edward Elgar, pp.213-252.
- Favereau O., Le Gall (2003) Règles, normes, routines, in Allouche J. et al (ed), *Encyclopédie des ressources humaines*, Paris, Vuibert.
- Favereau O. et Thevenot L. (1996) Réflexions sur une notion d'équilibre utilisable dans une économie de marchés et d'organisations, in Ballot G. (ed), *Les marchés internes du travail : de la microéconomie à la macroéconomie*, Collection Économie, Paris, PUF, pp.273-313.
- Gadrey J. (2003) *Socio-économie des services*, Collection Repères, Paris, La Découverte.
- Genard J.L. (1999) *La grammaire de la responsabilité*, Paris, Éditions du Cerf.
- Gomel B., Simonin B. (1998) Les emplois-jeunes, un pari sur l'avenir pour tenter d'échapper au

- traitement social du chômage, revue *Le Banquet*, no.11, fevrier.
- Hirschman A.O. (1970) *Exit, Voice and Loyalty*, Boston, Harvard University Press. (矢野修一訳『離脱・発言・忠誠』ミネルヴァ書房、2005)
- Jeammaud A., Kirat T. et Villeval M.C. (1996) Les règles juridiques, l'entreprise et son institutionnalisation, *Revue Internationale de Droit Économique*, no.1, pp.99-141.
- Kreps D. (1990) Corporate culture and economic theory, in Alt J.E., Shepsle K.A. (eds), *Perspectives on Positive Political Economy*, Cambridge, Cambridge University Press, pp.90-143.
- Lamont M., Thévenot L. (eds) (2000) *Rethinking comparative cultural sociology : repertoires of evaluation in France and United States*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Latour B. (1994) Une sociologie sans objet? Note théorique sur l'interobjectivité, *Sociologie du Travail*, no.4, pp.609-16.
- Latour B. (2002) *La fabrique du droit : une ethnographie du Conseil d'État*, Paris, La Découverte.
- Lefort C. (1978) *Les formes de l'histoire : essais d'anthropologie politique*, Paris, Gallimard.
- Levinas E. (1982) *Éthique et infini*, dialogues avec Philippe Némo, Paris, Fayard. (西山雄二訳『倫理と無限：フィリップ・ネモとの対話』筑摩書房、2010)
- Lewis D. (1969) *Convention : a philosophical study*, Harvard University Press, Cambridge.
- Livet P. (1994) *La communauté virtuelle : action et communication*, Combas, Éditions de l'Éclat.
- Livet P. (2000) Ontologie, institution, et explication sociologique, *Raisons Pratiques*, no.11, pp.15-42.
- Livet P., Thévenot L. (1994) Les catégories de l'action collective, in Orléan A. (ed), *Analyse économique des conventions*, Collection économie, Paris, PUF, pp.139-67.
- North D. (1990) *Institutions, Institutional Change and Economic Performance*, Cambridge, Cambridge University Press. (竹下公視訳『制度・制度変化・経済成果』晃洋書房、1994)
- Orléan A. (1999) *Le pouvoir de la finance*, Paris, Odile Jacob. (坂口明義・清水和巳訳『金融の権力』藤原書店、2001)
- Pélabey J. (2001) *Charles Taylor, penseur de la pluralité*, Paris, L'Harmattan.
- Popper K.R. (1991) *La connaissance objective*, traduction française de : *Objective Knowledge*, 1979, Paris, Champs-Flammarion. (森博訳『客観的知識』木鐸社、1974)
- Postel N. (2003) *Les règles dans la pensée économique contemporaine*, Paris, CNRS editions.
- Rawls J. (1955) Two concepts of rules, *Philosophical review*, January, pp.3-32.
- Rawls J. (1972) *A Theory of Justice*, Oxford, Oxford University Press. (川本隆史・福間聡・神島裕子訳『正義論』紀伊國屋書店、2010)
- Rawls J. (1993) *Justice et démocratie*, Paris, Éditions du Sueil.
- Reberieux A. (2002) *Gouvernance d'entreprise et théorie de la firme*, Thèse de doctorat de sciences économiques, Université Paris X.
- Rey J.F. (1997) *Lévinas : le passeur de justice*, Collection Le Bien Commun, Paris, Éditions Michalon.
- Reynaud B. (1992) *Le salaire, la règle et le marché*, Paris, Ed. Christian Bourgois.

- Reynaud B. (2002) *The Practical Knowledge of Operating Rules*, London, Macmillan.
- Reynaud J.D. (1995) *Le conflit, la négociation et la règle*, Toulouse, Éditions Octares.
- Reynaud J.D. (1997) *Les règles du jeu*, 3ème édition, Paris, Colin.
- Richet D. (1973) *La France moderne : l'esprit des institutions*, Paris, Flammarion.
- Ricoeur P. (1990) *Soi-même comme un autre*, Collection L'ordre philosophique, Paris, Éditions du Seuil.  
(久米博訳『他者のような自己自身』法政大学出版局、1996)
- Ricoeur P. (1995a) La place du politique dans une conception pluraliste des principes de justice, in Affichard J. et de Foucauld J.B. (eds), *Pluralisme et équité*, Paris, Éditions Esprit, pp.71-84.
- Ricoeur P. (1995b) *Le juste*, Paris, Éditions Esprit. (久米博訳『正義をこえて』法政大学出版局、2007)
- Ripert G. (1951) *Aspects juridiques du capitalisme moderne*, Paris, LGDJ.
- Robe J.P. (1995) *L'entreprise et le droit*, Collection Que sais-je?, Paris, PUF.
- Rollinat R. (1996) L'histoire économique et le statut des institutions, *Economie et Sociétés*, Serie AF, vol.22, no.4-5, pp.375-94.
- Salais R. (1998a) Le travail à l'épreuve de ses produits, in Supiot A. (ed), *Le travail en perspectives*, Paris, LGDJ, pp.45-68.
- Salais R. (1998b) Action publique et conventions : état des lieux, in Commaille J. et Jobert B. (eds), *Les métamorphoses de la régulation politique*, Paris, LGDJ, pp.55-81.
- Salais R. et al (eds) (1998) *Institutions et conventions : la réflexivité de l'action économique*, Raison Pratiques no.9, Éditions de l'EHESS.
- Salais R., Baverez N., Reynaud B. (1999) *L'invention du chômage*, Collection Quadriga, 2ème édition, Paris, PUF.
- Salais R., Storper M. (1993) *Les mondes de production : enquête sur l'identité économique de la France*, Paris, Éditions de l'EHESS.
- Schotter A. (1981) *The Economic Theory of Social Institutions*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Searl J. (1995) *The Construction of Social Reality*, London, Penguin Books.
- Sen A. (1981) *Poverty and Famines : an Essay on Entitlement and Deprivation*, Oxford, Clarendon Press.  
(黒崎卓・山崎幸治訳『貧困と飢饉』岩波書店、2000)
- Sen A. (1999) *Development as Freedom*, Oxford, Oxford University Press. (石塚雅彦訳『自由と経済開発』日本経済新聞社、2002)
- Spitz J.F. (1995) La liberté politique : essai de généalogie conceptuelle, Collection Léviathan, Paris, PUF.
- Tassin E. (1999) *Le trésor perdu : Hannah Arendt, l'intelligence de l'action politique*, Collection Critique de la Politique, Paris, Payot.
- Taylor C. (1971) Interpretation and the Sciences of Man, *Review of Metaphysics*, september.
- Thévenon O. (2003) *Les relations emploi-famille en Europe*, Thèse de doctorat de sciences économiques, Université de Paris X.
- Thévenot L. (1985) Les investissements de forme, in *Conventions économiques*, Cahiers du CEE, Paris,

PUF, pp.21-71.

Thévenot L. (1992a) Un pluralisme sans relativisme? Théories et pratiques du sens de la justice, in Affichard J. et de Foucauld J.B. (eds), *Justice sociale et inégalités*, Paris, Aeditions Esprit, pp.221-53.

Thévenot L. (1992b) Jugements ordinaires et jugement de droit, *Annales ESC*, no.6, novembre-décembre, pp.1279-99.

Thévenot L. (1995) L'action publique contre l'exclusion - dans des approches pluralistes du juste, in Affichard J. et de Foucauld J.B. (eds), *Pluralisme et équité*, Paris, Éditions Esprit, pp.51-69.

Thevenot L. (2001) Les justifications du service public peuvent-elles contenir le marché?, in Lyon-Caen A. et Champeil-Desplats V. (eds), *Services publics et droit fondamentaux dans la construction européenne*, Paris Dalloz, pp.127-43.

Tromm D., Zimmermann B. (2001) Cadres et institutions des problèmes publics : les cas du chômage et du paysage, *Raison Pratique*, no.12, pp.281-315.

White H.C. (1992) *Identity and Control: a Structural Theory of Social Action*, Princeton, Princeton University Press.

Williamson O.E. (1996) *The Mechanisms of Governance*, Oxford, Oxford University Press.

Zimmermann B. (2001) *La constitution du chômage en Allemagne : entre professions et territoires*, Paris, Éditions de la MSH.